

教師用指導書

根津真知子

1. 作成の経緯

初級教科書開発に当たって、当初から教師用指導書の作成は予定されていたが、教科書の本文の作成を最優先させ、その完成後に取りかかることになっていた。本紀要の初級教科書総論で触れていることでもあるが、講談社インターナショナル社との出版交渉の中で、出版条件として英語での教師用指導書作成が入ったため、教科書出版に向けての編集作業と同時進行の形で教師用指導書を作り始めることとなった。その作成には初級教科書編集責任者の根津、そして平田、村野の三人が担当して、教科書出版に半年遅れて1997年春、出版された。

2. 作成上の基本的姿勢

教師用指導書が英語で書かれたことから当然察せられることであるが、基本的にはこの指導書は日本語を母語としない日本語教師のために書かれたものである。本教科書は大学生が日常的に遭遇するであろう状況設定の中で正確かつ適切な日本語で聴き・話し・読み・書きの四技能を通してコミュニケーションをはかることが可能になることをその目標に英語の解説で編集されているのであるが、その「正確かつ適切な日本語」について、日本語を母語としない日本語教師たちに指導書と本教科書のGRAMMAR NOTESで十分理解してもらい、実際の授業で日本語でコミュニケーションをはかる際の手だてとなるように作成することを最重要視した。それは、80年代後半の日本語学習者の激増に伴い、特に英語圏の国々では大学での日本語教師養成プログラムで日本語教師になるべく教育された教師の数が絶対的に不足し、日本語を専攻しただけの人やあるいは日本語を数年学習した人たちまでもが日本語教師として教壇に立つようになり、そのような教師から教科書に付随した指導書が強く望まれたということがあったからである。また、本教科書と同じ様な学習目標を立てて開発された教科書の中には、十分な文法的解説が教科書にも指導書にもなくて、現場の教師は市販の文法書をいろいろ当たって調べたりする時間をかなり費やしているという声が聞かれたということも日本語を母語としない日本語教師のために英語での指導書作成を進めさせることとなった要因でもある。

また、本教科書の「大学生が日常的に遭遇するであろう状況設定」の「大学生」はICUでの日本語学習者を想定し、かれらが遭遇するであろう状況が設定されているため、特に語彙面では、「三鷹」や「吉祥寺」など、また内容面では電車の交通機関などが当然出てくるが、国内の他の地域あるいは外国で本教科書が使用された場合には必ずしもそこ

での「大学生が日常的に遭遇する状況」ではないことがあり得る。たとえば、外国での使用を考えると、「三鷹」や「吉祥寺」よりも「札幌」や「広島」の方が日本についての知識としてはより一般的かも知れないし、電車の交通機関のない地域も多いだろう。このようなことは本教科書だけに限らず日本語教科書を開発する者が常にジレンマに感じるところである。多くの教育機関がそこで使うために独自の教科書を開発する傾向にあるのはそのためであろう。とはいえ、教科書開発に費やす時間とエネルギーを持ち合わせていない教育機関の方が圧倒的に多いのであるから、市販の教科書として世に出すためには、より多くの地域での大学生が日常的に遭遇するであろう共通の一般的な状況を設定することが肝要である。本教科書は殆どの状況設定がそれに沿うように編集されているが、状況は一般的ではあってもその状況での内容、それに関連して語彙が、使用する学校機関によってはその大学生たちにとって有意味でない場合があるので、現場の教師が臨機応変に語彙や内容を変えられるように「Make up your own situation」、「Give your own response」などとなっていることを予め徹底することを目指した。日本語を学習している環境の違いにかかわらず、学習者が本教科書を使いながら学習者自身に関連づけられる有意義なコミュニケーションができるようになることが本教科書の目標であるから、それを可能にさせる教科書の使い方の指導が基本になると考えた。

その視点から本教科書を見て、日英両語で書かれている「この本の使い方」を教師が熟読すると、技能別の LISTENING AND SPEAKING セクション、READING セクション、WRITING セクションの使い方の解説の中で、READING と WRITING のセクションの教え方には恐らく大きな問題は生じないだろうが、LISTENING AND SPEAKING セクションの教え方には教科書開発者の意図するところをより詳細に説明しなければ十分ではないということになった。そこで、本指導書には LISTENING AND SPEAKING セクションのフォーメーション、ドリル、そしてロールプレイの教え方の一例を示すことに決定し、構成を次のようにすることとした。

3. 教師用指導書の構成

まず、巻頭の INTRODUCTION では以下の点を述べた。

Principles (教科書の理念) : 本教科書は構造・場面・機能の三シラバスの重層シラバスから成り、第一巻では学習者自身とそれを取り巻く身近な環境の中で、第二巻では学習者が頻繁に遭遇する状況の中で、そして第三巻では学生生活で経験する社会的または公的な状況の中で、学習者が正確かつ適切な日本語でコミュニケーションを達成できるようにすることを目標としている。

Time Allotment (時間配分) : 全 30 課を約 300 時間で学習する。各課の時間配分の目安は次のようにする。

フォーメーション	2時間
ドリル	3時間
ロールプレイ	1時間
読解	1時間
漢字	2時間

Audio Tapes (音声テープ) : テープにはGetting Started、フォーメーション、そしてドリルが入っている。フォーメーションは、教科書には例とキューが示されているだけであるがテープには例にならって下線部を置き換えて学習者が発話する間とその答え部分も入っている。ドリルではモデル会話だけが入っている。置き換え部分に下線が付いているモデル会話に下の枠の中から語彙や表現を選んで練習するのであるが、その選択肢は一つとは限らないので、置き換え練習の部分は音声テープには入っていない。

Structure of the Teachers Manual (教師用指導書の構成) : 各課のフォーメーション、ドリル、そしてロールプレイの教室活動の一例を示す。

General Points (教師用指導書を使う上での全般的留意点) :

1) フォーメーション

語彙や文法項目の正確さに焦点を当てた練習。授業の前に音声テープを使ってアクセントとイントネーション気をつけて聴きながら学習者が予習してくることが大前提である。その際、フォーメーションの練習を始める前にその課のGrammar Notesを予め自習させるよう指導する。

続いて、教師の主導で教室でフォーメーションを行うが、その教室活動は本文で詳しく示す。基本的にはフォーメーションの教室活動は教科書のその部分は閉じて見ないで行うこととする。授業後、再び学習者が音声テープといっしょに復習する。

2) ドリル

フォーメーションで練習した語彙や文法項目を使って設定された状況に適切な日本語でコミュニケーションできるように練習する。学習者が現実の生活で遭遇しそうな状況をできるだけ取り入れることが、学習を促進させる上で、大切である。教師は特定のドリルを始める前にそのドリルで使われる語彙・文法項目・表現をまず復習する教室活動を導入する。それから実際にドリル活動をするが、学習者が発音やイントネーションだけでなく、しぐさ・声の調子などもできるだけ自然な日本語になるまで繰り返し練習する。教室活動が活発に行われるようにゲーム・ペアワーク・シミュレーションなどしたり、ポスター・写真・絵教材・ワークシートなどを積極的

に使うことを勧める。ドリル練習の後、Q&Aで学習ポイントをまとめる。

3) ロールプレイ

その課までに学習した全ての語彙・文法項目・表現を総動員してロールプレイカードで英語で与えられて課題を達成する教室活動であるから、フォーメーションとドリルに比して教師のコントロールは少ないと思われがちであるが、学習者の自由な活動を最終的には教師の手中に置くという点でいくつかのポイントを押さえなければならない。

1. ロールプレイカードを学習者の人数分用意する
2. ロールプレイカードを学習者に配る前に、そのロールプレイに役立つ教室活動をウォームアップ活動として行う
3. ロールプレイの課題は達成しなければならないが、会話はできるだけ相手と自由に作り出すように励ます。巻末にあるモデル会話に拘束される必要はないことを予め伝える。
4. 学習者がペアでロールプレイをしている間、教師は各ペアを周り必要とあれば、また求められれば助ける
5. ロールプレイの役割AとBの両方をさせる時間を与える
6. 日々の学習者の学習状況を把握し、ペアを組む際の参考とする
7. ロールプレイ終了後時間の許す範囲で何組かのペアにモデル・ロールプレイをさせる
8. あるロールプレイはタスク活動であるので、タスクシートを予め用意し、学習者に記入させる
9. 学習者の誤用に関しては、1) 各ペアを回る際に必要とあれば個々に対応する、2) 多くの学習者に共通の誤用の場合には、ロールプレイ後、モデル・ロールプレイをする前に正しい表現を練習する時間を取る、3) できるだけモデル・ロールプレイを音声テープあるいはビデオ・テープに収め、授業外に個々の学習者とそれを見て、指導する。

以上をINTRODUCTION で説明した後、各課の構成は次のようになっている。

Grammatical Points (文法項目) : 課の文法項目の列挙

Class Activities (教室活動) : 教科書のフォーメーションをできるだけ機械的な単調な流れにならないように、学習者自身の実際の情報なども引き出しながら練習する方法をその導入順序に沿って示す。

Drills (ドリル) : そのドリルの目標、準備する物あるいは準備すること、そのドリルに関連した課の表示、ドリルをどのように行うかについての教室活動、宿

題（ドリル授業前日あるいは授業後）、文化ノート

Roleplays（ロールプレイ）：そのロールプレイの目標、準備する物あるいは準備すること、そのロールプレイに関連した課の表示、ロールプレイをさせる前のウォームアップ教室活動、宿題（ロールプレイ授業前日あるいは授業後）、文化ノート

4. 今後の課題

時間的制約の中で作成した指導書であるが、作成にあたっては市販されている教師用指導書を参考にしたり、作成者三人で話し合っ、最終的には上のような指導書の内容となった。英語を始め内容等に問題もあろうかと思うが、今後は実際にこの指導書を使っ、てくださる先生がたからの御助言を仰ぎ改善のための努力をしたいと願っている。